

1960年代から1970年代 における「良い演技」とは —新劇とアンガラ演劇に着目して—

奈良女子大学中等教育学校6年

問題の所在：「良い演技」とは

- 1960年代から1970年代における「良い演技」
演技評価の調査を限定した時代で行い、
「良い演技」の一端を明らかにする。



先行研究・調査方法

先行研究として『演劇学論集 日本演劇学会紀要』1～73巻（1957年～2021年）を確認した。

⇒1960年代～1970年代の劇評や演技評価に関する論文は無し。

●調査方法

- ①1960年～1979年の演劇雑誌『テアトロ』の劇評の内容を分析する。
- ②『千田是也演劇論集』第1～7巻に掲載された1945年～1974年の千田是也の論述から、当時の新劇の動きなどを明らかにする。
- ③ 調査①と②の結果を照らし合わせ、仮説を導く。

調査①の結果

劇評を調査した結果、記述内容の特徴の変化から**1960年代前半**・**1960年代後半**・**1970年代**という3つの期間に分けることができた。

1960年代前半

- ・ 戯曲や演出の評価が中心
- ・ 戯曲と政治的思想を関連させた発言
- ・ 演技評価は少ない

戯曲と演出重視



1960年代後半

- ・ 戯曲や演出の評価が中心
- ・ 演技評価が詳細にされる
- ・ 劇評の題名に演技に関する言葉や俳優の個人名を使う

演技や各俳優への注目がより高まる



1970年代

- ・ 特定の俳優個人に注目して演技評価する劇評が多い
- ・ 「俳優中心主義」への批判
- ・ 演技の為の演出を求める声

演技や俳優個人への注目がより高まる

調査②の結果

『千田是也演劇論集』の調査から、次のようなことがわかった。

●戦後の新劇の流れ

- ・政治から離れ、戯曲の内容を表現する形式で発展。
- ・1960年代の安保闘争で政治的内容を取り入れた演劇が増加、新劇の芝居が停滞。
- ・安保闘争後にテレビや映画、アングラ演劇が人気を得る
⇒新劇がダメージを受ける。

●俳優個人への評価について

千田は共同での演劇作りを重視、「俳優至上主義」を非難。
⇒マスコミなどを中心に俳優個人への評価が増え、
演劇界からも肯定的な意見がある。

●演技について

千田は役同士の関係性を重視、関係性を演じない演技を批判。

仮説の生成

調査①・②の結果から次の4つの仮説を導いた。

●1960年代について

- A. 演劇（特に新劇）において戯曲を舞台上で忠実に再現することが重視されていた。
- B. 新劇界全体が安保闘争にかかわり、演劇人が思想的スタンスを演劇で表現することに力を注いだ。
⇒評価の中心が戯曲になった。

●1970年代について

- C. テレビや映画への俳優の出演やアングラ演劇の流行がきっかけで俳優個人の個性や演技が注目される。
- D. 新劇を中心に、アングラ演劇での俳優の演技への批判が起こる。

仮説の検証

A. 1960年代の演劇（特に新劇）において

戯曲を舞台上で忠実に再現することが重視された。

- ・ 1960年以前の新劇の劇評でも、演技評価は抽象的で簡素。

⇒戦後の新劇ではこの状況が長年続いていた。

- ・ 新劇では、

「演技や演出は、**原則的には戯曲の作品世界をどれだけ忠実かつ精密に舞台表現たらしめることができるか、という基準によって評価**されるものであった」（菅,1981,p.200）

B. 新劇全体が安保闘争にかかわり、演劇人が演劇での思想的スタンスの表現に力を注いだため、評価の中心が戯曲になった。

- ・ 1960年の安保闘争に関する舞台は学生演劇でも行われていた。

- ・ 当時高揚していた安保闘争に対する演劇人の思想的スタンスの表現が、戯曲中心である当時の演劇で行われた。

⇒評価の中心が戯曲になったと考えられる。

仮説の検証

C. テレビや映画への俳優の出演やアングラ演劇の流行がきっかけで俳優個人の個性や演技が注目される。

- ・ 新劇俳優のテレビや映画への積極的な出演は1953年頃から1960年代半ばまで行われていた。
- ・ アングラ演劇は俳優の身体表現を鑑賞する演劇である。
⇒ 1970年代のアングラ演劇の流行により、演劇の鑑賞時に俳優に注目する姿勢が観客に広まったことが考えられる。

仮説の検証

D. 新劇を中心に、アングラ演劇での俳優の演技への批判が起こる。

- ・ 「**新劇からテント・小劇場パラダイムへの全面的な転態**は、一九六六～六七年においてこそ、ようやくなされた」
（菅,1981,p.192）
- ・ 「この**劇意識の変容**は、まず第一に、俳優の身体についての意識を変えた」（菅,1981,p.202）

新劇「俳優の身体は戯曲に従属し、演出に従属し、
俳優の『精神』に従属する道具」（同上）

アングラ演劇「俳優の身体は道具であると同時に主体であった」
（同上）

アングラ演劇の劇意識は、新劇とは相反するもの

⇒新劇からアングラ演劇の演技へ批判が起こったと考えられる。

「仮説の検証」から

新劇が主流

1960年代

劇意識の変化



重要

アングラ演劇
が流行

1970年代

当時の新劇とアングラ演劇の演技に着目、
それぞれの演劇において「良い演技」とされていたものについて考える

1. **千田是也、鈴木忠志の著書や彼らに関する書籍を調査し、
彼らの演技についての考え方を明らかにする。**

千田是也…新劇の代表的な演出家

鈴木忠志…アングラ演劇の代表的な演出家

2. **二者を比較、新劇とアングラ演劇における「良い演技」について
考察を行う。**

千田是也の演技論

- ・俳優は自らの身体をコントロールする技術を身につけ、役の行動を計画して演じるべき。
- ・日常生活の中での自然な行動をもとに演技を組み立てるべき。
- ・俳優は戯曲を基に、他の役や環境など、役を取り巻く他者との関係性を演技で表現するべき。
- ・俳優は演技を通して登場人物の感情を表現し、作者の思想を表現する必要がある。

鈴木忠志の演技論

- ・ 演劇の目的は、舞台という作られた空間の中で俳優が演技し観客に作者の思想を考えさせること。
- ・ 「舞台上を生きる本人が（中略）どれだけの実在感を、その人なりの生活史的根拠において、見る者に感じさせることができたか」（鈴木,1973,p.69）が重要。
- ・ 鈴木の世界では、演じている言葉や身振りを必要としている人間の存在を表すことが求められる。
- ・ このような新鮮な演技を行うには、意識的な長い訓練により直観的なインスピレーションを得ることが必要。
⇒ アングラ演劇における根底的認識

結論—「良い演技」とは

●新劇

戯曲を忠実に再現し、作者の思想を観客に伝える演劇。

⇒日常生活の身体的行動の経験を基に**計画した行動**で、**役の感情や他者との関係性を表現し作者の思想を感じさせる**演技。

●アングラ演劇

俳優が舞台上で「生きる」身体表現が主体の演劇。

⇒非日常的な舞台上で、**役を通して俳優自身のエネルギー**を行動によって表現し**役の人間性や実在感を観客に感じさせる**演技。

引用文献

- 菅孝行『戦後演劇—新劇はのりこえられたか』
朝日新聞社、1981年
- 鈴木忠志「側面的演技考」
『鈴木忠志演劇論集内角の和・Ⅰ』而立書房、1973年